

平成25年度  
日本造園学会関西支部大会  
研究・事例報告発表要旨集

---

Proceedings of the Kansai Branch Meeting of  
Japanese Institute of Landscape Architecture

平成25年10月26日(土)・27日(日)  
大阪大会

主 催

社団法人 日本造園学会 関西支部

Kansai Branch of  
Japanese Institute of Landscape Architecture

## ■ 研究・事例発表セッション（口頭発表）プログラム

<第1会場・I-site なんば2階C1>

### 第1セッション：10：00～11：00

ゆらぎによる空間の変容

○佐野拓匡（大阪芸術大学） ..... 1

風力発電艦隊

○中澤公博（大阪芸術大学） ..... 3

イベント時におけるイルミネーション空間での来場者の行動の特徴について

○浅野拓馬・村上修一（滋賀県立大学） ..... 5

大阪新梅田シティ庭園部巨大緑化壁工事差し止めの仮処分申請における新聞報道の考察

○中橋文夫（鳥取環境大学） ..... 7

### 第2セッション：11：00～11：47

庭の静けさを形成する要因 - 京都大原・勝林院の杉苔を例に-

○小松正史（京都精華大学） ..... 9

河川取水における先人の知恵を表象する斜め堰の景観

○村上修一（滋賀県立大学） ..... 11

老人ホームの庭園設計について～北京四合院の日本式枯山水庭園の運用～

○李黙晨・福原成雄（大阪芸術大学） ..... 13

### 第3セッション：13：20～14：20

「無鄰菴の維持管理」 - 時代の感性を読み取る -

○阪上富男・加藤友規（植彌加藤造園（株）） ..... 15

「一日花」の意味と「ムクゲは一日花」の真偽を探る（予報）

下村孝（花と緑の生活文化研究所準備室/京都府立大学）・

○勝川健三（宇治市植物公園） ..... 17

北京市における集合住宅の住棟周囲の植栽に関する調査

○金栄・村上修一（滋賀県立大学） ..... 19

京都市における街路樹の良好な景観形成と育成管理に資する基礎調査

○高堂友実・三宅義彦・片山博昭（京都市） ..... 21

## 1. 無鄰菴の概要

平安遷都より1200年の歴史を持つ京都において、岡崎・南禅寺界限は、明治23年(1890)の琵琶湖疏水開通以降、東山を望む風光明媚な別荘群、及び文化的な景観を持つ地域として発達した。この地域における別荘群の先駆けとして、明治29年(1896)七代目・小川治兵衛により作庭された元勲・山縣有朋の別邸が、無鄰菴である。昭和16年(1941)に京都市が譲り受け、昭和26年(1951)には国の名勝に指定されている。

敷地面積は3,135 m<sup>2</sup> (約950坪)。東山を借景とした明るく開放的な芝生空間と、軽快な水の流れを有する。『京華林泉帖』{明治42年(1909)}には、「無鄰菴は野趣にとんだ新庭園の代表」、『続江湖快心録』{明治40年(1907)}では「以後の庭園はことごとく無鄰菴に倣っている」と記述されており、近代庭園の先駆けともいわれる庭園である。

## 2. 時代の感性を読み取る

無鄰菴の作庭において山縣は、京都の伝統的な作風を好まず、自然風の庭園を望んだ。コケの代わりに芝生を張ること、シダを植えること、京都では滅多に使われなかったモミを群植すること、滞留する池ではなく流れを施すことなど、山縣自らが指示したと『続江湖快心録』に記述されている。また『京華林泉帖』に掲載されている写真をみると、芝生が伸び、まるで野原のような空間が写し出されており、芝生をきれいに刈り揃える現代の維持管理とは、明らかに異なる。野趣を尊重する美意識を読み取ることができる。

作庭より117年が経つ現在においても、施主である山縣の想いを尊重し、明治という時代における山縣の感性と、現代における感覚の違いを見極めながら、環境の変化・生態の変化を考慮しつつ、無鄰菴の維持管理を行っている。

また、山縣は「恩賜稚松の記」に“苔の青みたる中に名も知らぬ花咲き出でたるもめずらし…”など、無鄰菴で過ごし、楽しんだ様子を記している。ここからも、現在では雑草として抜き取られる自然に咲く野花を、庭園の構成要素の一つとして愛でる対象としており、現代とは違った感性で庭園が成り立っていることがうかがえる。その美意識を尊重し、現代に受け入れられる感覚を大切にしている。

### 1) 東山の借景

作庭当初、借景となる東山を際立たせるため、庭園の外縁樹木は低く抑えられていた。近隣の市街地化に伴い、庭園周囲に構造物が並び立つようになり、それらを隠す

ために樹木の高さが引き上げられた。しかし、時の流れと共に樹木は大きく成長し、近年においては手入れが行き届かなくなり、繁茂した状態となっていた。平成 19 年（2007）にプロポーザル入札制度が導入され、私の職場が維持管理に携わるようになってからは、現在の環境や状況に合わせ、積極的に修復剪定をすすめている。

生垣のように面的に繁茂し、絡み合った枝は、1 本 1 本が単独で主張するように樹姿を向上させる。また、外部からの遮蔽性をも併せ持つ。そして、東山がより大きく感じられるよう、外周の構造物を隠しながら、東山との一体感を演出している。

## 2) 芝生と野花

無鄰菴の特色の一つでもある開放的空間を作り出す芝生は、定期的にただ機械的に刈るのではない。まず、野花の種類と開花時期について把握する。その上で、雑草を手で抜く時期、野花を咲き終わりに伴い手で抜く時期、機械で芝生を刈る時期、また場所に応じて芝生の長さを変えるなど、季節や場所に応じて手法を見極め、管理している。

山縣が眺めていたであろう、野花が咲く風景に想いを馳せながら、野趣あふれる芝生空間となるよう心掛けている。

## 3) コケの管理

山縣は『続江湖快心録』において「…苔によっては面白くないから、私は断じて芝を栽ることにした。…彼方は鬼芝を栽てそれで時々刈せる、…」と述べている。このことから、作庭当初はコケではなく、芝生を好んで植えたことがうかがえる。しかし、無鄰菴は、琵琶湖疏水から引き込まれる流れの影響により、空中湿度の高い、コケが生育しやすい環境である。そのため、芝の一部が遷移するなど、現在無鄰菴には約 80 種にわたる様々なコケが生育していることがわかっている<sup>1)</sup>。明るい場所を好み乾燥に強いウマスギゴケ、やや暗い場所を好み乾燥に強いホソバオキナゴケなど、コケ個々の生育環境を把握し、管理することが大切である。

おわりに

無鄰菴の維持管理をするにあたり、大切にしていることがある。無鄰菴作庭時における山縣の意図や、無鄰菴で過ごし、楽しんだ景色を尊重し、現代とは異なる当時の美意識を感じとったうえで、現代に受け入れられる感覚を見極めることである。

注釈 1) 信州大学農学部・大石善隆博士との共同調査・研究により、無鄰菴には約 80 種のコケの成育が確認されている。

参考文献

湯本文彦『京華林泉帖』（1909）京都府庁 pp.140

黒田天外『続江湖快心録』山田聖華書房（1907）pp.258